

オレ様エリートと 愛のない妊活はじめました

有允ひろみ

Hiromi Yuuin



目次

オレ様エリートと愛のないパパ活はじめました

書き下ろし番外編

オレ様エリートと愛ある子育て生活送っています

オレ様エリートと
愛のない妊活はじめました

「男なんていらない。優先すべきは仕事で、ほかはぜんぶ後回しでいい」
山久姫乃は、少し前まで本気でそう思っていた。

けれど、今はちょっとだけ違う。

猛烈に、子供がほしい！

そう考えるに至ったのは、つい先日、三十路を迎えたのがきっかけだ。

過去の経験から、すでに恋愛も結婚も諦めており、生涯独身なのは確定している。

それも悪くないし、むしろそのほうが性に合っている。

しかし同時に、どうしようもない寂寥感が心の中で徐々に大きくなりつつあった。

そこから、何かもっと別の生き方があるのではないかと思うようになり、最終的に子供を持つという考えに至ったのだ。

もちろんいろいろと考え抜いて出した結論であり、命をはぐくみ育てていく覚悟をした以上、この思いは真剣だ。

それゆえ熟考の上に、一番現実的な方法を取る事にした。

「お願い！ 私、どうしても子種がほしいの。誰か優秀な遺伝子を持った男の人を紹介して！」

待ち合わせをしたカフェの窓際で、姫乃は親友の戸田祥子に一世一代の頼み事をした。テーブルに肘をついてかなり前のめりになつてしているのは、さすがにこの話を周りに聞かれるのはマズいと思つたからだ。

「ちょっと待ってよ！ 優秀な遺伝子つてどういう事？」

いきなりの頼み事に、祥子が口をあんぐりと開けたまま啞然とする。もちろん、そんな反応は予測済みだ。

「私、一生のパートナーはいるけど、子供はほしいと思うようになつたの。自分の分身をこの世に残したい——産んで育てて見守りたいっていう気持ちが膨らんで、抑えきれなくなつちゃったのよ」

姫乃は拳を握りしめて、真剣な表情を浮かべた。

「はあ？ いきなり何を言い出すのかと思えば……。そんな極端な事言つてないで、恋愛をしなさいよ。まだ若いんだし、姫乃さえその気になれば、きっといい人と出会えるわよ」

「ううん。祥子の気持ちはありがたいけど、恋愛なんてしてる暇ないし、する気もまつ

たくないの」

祥子に諭されたが、姫乃は頑なに首を横に振る。

「第一、恋愛の仕方なんか、とつくなき昔に忘れちゃつたわよ。それでいいし、恋愛よりも仕事を優先させて、がむしゃらに頑張ってきたからこそ、今の私があるの」

姫乃は都心の繁華街から少し離れた場所でジュエリーショップを営んでいる。

店の名前は「H I M E N O」と言い、扱っている商品はすべて手作りの一点もので、デザインも完全オリジナルだ。商品は何度かメディアに取り上げられ、それがきっかけになって、ある恋愛ドラマのロケ地として店が使われたこともあつた。おかげで、オーブン以来売り上げは上々で、かなりの利益が出ている。

今回の件は「H I M E N O」の経営状態と信頼のおけるスタッフがいる事を踏まえた上で、実現可能だと判断した。

「姫乃が仕事を頑張ってきたのは、よく知ってるよ。でも、だからってパートナーなしで子供を持つとか……。ねえ、本当に恋愛する気ないの？ もしよかつたら、正光によさそうな人を紹介してもらおうか？」

正光というのは彼女の夫であり、アパレルメーカー「ソリス」の代表取締役社長だ。「ソリス」は「H I M E N O」の取引先でもあり、正光とは祥子を介して以前から面識があった。「私が恋人より仕事を優先して、ことごとくしくじったのを知ってるでしょ？ 私つて

恋愛に向いてないんだよ。もし仮に誰かと付き合つたとしても、また失敗するに決まつてる」

「でも……」

「よくよく考えた上で出した結論よ。もちろん全責任は私が負うし、認知とか養育費とか面倒な事も一切なし。当然それなりの対価を払うつもりだし、妊娠に至るまでの費用も私がぜんぶ持つ。本当に、ただ子種を提供してもらうだけでいいの。祥子にはぜったいに迷惑をかけないつて約束するし、本当に紹介してくれるだけでいいから」

祥子はまだ難しい顔をしている。けれど、姫乃が言い出したら聞かない事や、一度こうと決めたら最後まで頑張り抜く性格である事を重々知っていた。

「姫乃が本気で子供をほしいと思っているのは、わかつた。だけど、一人で産んで育てるつて相当大変だよ？」

「それも覚悟の上だし、自分なりにシミュレーションして、なんとかなるつて思えたから実行に移すことになったの。当然、計画どおりにはいかないだろうし、やつてみなくちやわからぬ事も多々あると思う。だけど、頑張りたいの」

姫乃の熱意が通じたのか、祥子が考え込むような表情を浮かべる。

あと一押し――

「こんな事を頼めるの、祥子しかいないのよ。ネットを通じて精子の売買とかボランティアで提供してる人もいるけど、それだといろいろリスクがあるでしょう？ でも、祥子が紹介してくれる人なら安心だし、意思の疎通も取りやすいと思うの。だから、お願ひつ！」

姫乃は祥子に向かつて両手をパンと合わせた。すると、祥子がため息をつきながら首を縦に振った。

「あなたってば、言い出したら聞かないんだから……。わかつたわよ。正光にも力を借りて、なんとかして探してみる」

祥子の承諾を受けて、姫乃はテーブルの上の彼女の手を両手でギュッと握った。

「ありがとうございます！ 祥子ならそう言つてくれると信じてた！ 一生感謝するし、頑張つていいママになるつて約束する！」

姫乃は興奮して鼻息を荒くする。それを見て、祥子が笑い声を漏らした。

「気が早いわね。それで優秀な遺伝子っていうのは、どの程度のものを指してるので？」

祥子がスマートフォンを取り出して、メモを取るしぐさをする。

「紹介するからには、できる限り希望に沿った人をピックアップさせてもらうわよ。頭がいいのは絶対条件として、やっぱり、できるだけ容姿端麗なほうがいいでしょ？ 運動神経もいいに越した事ないし、あとは人柄とか？」

さすが元社長秘書だ。やると決めたらすぐに取り掛かってくれるのが嬉しい。

「お願いできるなら、贅沢は言わない。だけど、いくら恋愛抜きの妊娠が目的とはいえ、パートナーがいる人の精子をもらうのはさすがに気が引けるかな」

「それもそうね。ほかには何かある？ どこまで希望に添えるかわからないけど、一応正直な気持ちを聞かせて」

祥子に促され、姫乃は指折り数えながら希望する条件を挙げていった。

「さつき祥子が言つてくれたような人なら、文句なしだよ。あえて付け加えるなら、生まれてくる子供のためにも、目鼻立ちがはつきりしていたほうがいいかな」

姫乃は奥二重であり、顔のパツツがすべて小ぶりだ。バランスはいい感じに配置されているものの、どちらかと言えば地味顔で華やかさに欠ける。

昔からそれがコンプレックスだった姫乃は、プライベートはともかく、ビジネスの時は常にフルメイクだ。

「じゃあ、頭の良さと目鼻立ちを優先して探してみるわね。だけど、過剰な期待はしないでよ」

「わかつた。よろしくお願ひしますっ！」

姫乃は、今一度祥子に向かつて深く頭を下げた。

それからひと月経った、六月の第三金曜日。

姫乃は祥子から紹介された「神野友哉」なる男性と顔を合わせるべく、都内にあるTホテルのプレミアムフロアを目指していた。

『いい人が見つかったわよ』

そぞ祥子から連絡をもらったのは、ほんの二日前のことだ。

心の準備は万端ではないものの、互いの都合をすり合わせたところ、今日を逃せば会うのは半月先になると言われた。

それで急遽仕事終わりに会う事になつたのだが、時間が経つにつれて緊張が高まつてくる。せめて会う前に顔を見ておきたいと思ったが、適当な写真がないと言われ断念した。祥子が言うには、相手は姫乃の希望を完璧に満たしており、謝礼金や見返りなどは、いつさいらしいらしい。しかも高身長であるらしく、背丈に関する気遣いも不要だと言われた。

これについては正直ホッとした。

姫乃は、身長が一七三センチある。街でそれ違う男性の大半は姫乃よりも背が低く、必要に応じて靴のヒールの高さを調整する必要があるのだ。

いずれにせよ、戸田夫妻の紹介なら余計な心配はいらない。

『事情が事情だし、初対面だけど、はじめから二人きりのほうが気まずくなくていいで

しょ？ 具体的な方法とか条件とか、その時に話し合つて決めてね』

祥子にそう言われ、初回のみ彼女を通じて連絡を取り合つて、待ち合わせの場所を決めた。

Tホテルは、平日でも予約がいっぱいの人気ホテルだ。ビジネス用のプランも充実しており、「H I M E N O」から徒歩圏内という事もあって、日頃から商談などでよく使わせてもらっている。

何はともあれ、初対面の印象はよくしておかなければ――

そう思った姫乃は、閉店後の店のバックヤードで入念に化粧直しをした。
鏡の前で胸元まで伸びたストレートヘアを丁寧に梳^とき、耳の高さでまとめてバンスクリップで留める。

姫乃は色白で、顔にはシミひとつない。顔の作りがシンプルな分、アイラインで目尻を上げ、唇に色を差すだけで劇的に印象が変わる。
アイブロウで眉を整え、目蓋^{まぶた}にシックなブラウンのアイシャドウを入れる。次にブラツクのアイラインとマスカラで目力をアップして、仕上げに愛用のルージュで唇を赤く塗り直した。

（これでよし！）

は自信のかけらもないが、フルメイクをした顔なら胸を張つてどこへでも行ける。それも大学に入学して以来、自分なりにおしゃれの研究を重ねてきたおかげだ。

同時にファッショントリノについても独学で学び、それらが今の職業に就くきっかけになつたと言つても過言ではない。

約束の時刻まで、あと二十分。

本来ならもつと余裕を持つて部屋に入り、彼が来るのを待つべきだつた。しかし、出かけにお得意様から連絡が入り、出発が遅くなつてしまつたのだ。

道を急ぎながら、姫乃は今さらながら用意した部屋について悩み始める。

（ジュニアスイートとか、気合入りすぎだと思われないかな?）

面倒な依頼を引き受けてくれた人と会うのだから、それなりの場所を用意しなければならない。

そう考えた姫乃は、ダメ元で当日Tホテルにハイクラスの部屋に空きはないか問い合わせをした。すると、幸いにもジュニアスイートが一部屋だけ空いていたのだ。
(やつぱりワンランク下のエグゼクティブスイートあたりにしておいたほうがよかつた? もしくはデラックスルームとか……)

商談とは関係なく、姫乃は時折自分へのご褒美としてTホテルのデラックスルームに泊まり、ルームサービスで食事をしたりして優雅な時間を過ごす事があった。

しかし、いくらお気に入りの部屋でも二人では窮屈だ。かといって、エグゼクティブスイートだと広すぎる気がするし、ジュニアスイートくらいがちょうどいいと思つたのだが……

いずれにせよ、悩んでも時すでに遅し。

祥子から聞かされた話によると、神野は正光の幼馴染にして親友であるらしい。

姫乃が望んだとおりの優秀な遺伝子を持つ彼は、頭脳明晰かつ容姿端麗である上に正光同様自分で立ち上げた会社の社長をしているそうだ。

『夫婦で付き合いがある人だから、安心して。超絶イケメンだし、スタイルも抜群の完璧な人よ。ただ、すごくクールなの。根は優しくていい人なんだけど、とつつきにくらいところがあるかも。あと、多少俺様なところがあるから、その点は承知しておいてね』
祥子から念を押されたが、条件さえクリアしていれば少しくらい性格に難があつても問題はない。

仮にそれらが遺伝しても、育て方次第で素直で穏やかな子になつてくれるだろう。
約束の時刻まで、あと十五分弱。エレベーターでプレミアムフロアに到着し、チエツクインをするために専用のカウンターに向かう。

そこで待つていた顔見知りの女性コンシェルジュと笑顔で挨拶を交わし、カードタイプのルームキーを受け取ろうと手を伸ばした。

「山久様、昨日戸田祥子様からご連絡をいただきまして——」
ニアスイートは、祥子が昨日ホテルに電話をしてきて、部屋のグレードアップを希望したのだという。

戸田夫妻は、姫乃以上にTホテルを利用しているお得意様だ。姫乃が取っていたジュニアスイートは、祥子の計らいで知らぬ間にスイートルームに変更されていた。

差額は祥子が負担すると言つたようだが、そういう問題ではない。

妙に気を回すところがある祥子だ。もしや何か企んでの事かと思ひながら部屋のドアを開け、中に入る。案の定、目の前に見えるパノラマの窓がある部屋には、深紅の薔薇がそこかしこに飾られていた。部屋の照明はムードたっぷりのシャンパンゴールドで、窓の外には都会の煌びやかな夜景が広がっている。おまけに、窓際に置かれたテーブルには二人分のグラスとワインまで用意されていた。

(何これ！ これじやますます気合が入つてゐると思われちやうよ！)

別にロマンティックな夜を過ごすわけでもないのに……

用意されたゴージャスな演出の数々を前に、姫乃は狼狽えつゝ頬を引き攣らせた。祥子にしてみれば、きっとよかれと思っての事なのだろう。けれどここに来たのは、ただ単に精子の受け渡しをするためであり、それ以上でも以下でもない。

しかし、今からすべてを片付ける時間もないし、と思ひながら隣のベッドルームを覗

いた。

するとあろう事か、真っ白なシーツの上に薔薇の花びらでハートマークが描かれていた。

(これじゃまるで、新婚初夜じゃないの！)

明らかに過剰演出だし、目的との齟齬がある。

そうこうしているうちに、約束の時刻まであと一分を切つた。

せめてハートマークだけでも壊しておこうとした時、部屋のドアが開く音が聞こえた。

「こんばんは」

伸びやかで澄んだ男性の声に、姫乃はハタと動きを止めた。そして、くるりと踵を返し、部屋の入口に向かって声を上げる。

「はい、こんばんは！」

思いのほか大声が出てしまい、それに驚きながら一步踏み出して隣室に急いだ。ベッドルームを出た途端、部屋を見回している背の高い男性に出くわし、振り向いた顔を見て目を剥いて仰天する。

くつきりとした二重の目にスッと伸びた鼻筋。緩く閉じられた唇の形は完璧で、それらがすべて非の打ちどころのない輪郭の中に綺麗に収まっている。

姫乃は驚きの余り、絶句した。

その美男ぶりは、仮に街でそれ違ったとしたら確実に二度見するほどだ。立つているだけで絵になるし、こちらを見る視線は、どことなく^{けだる}氣怠^{だる}そうな色気まで帶びている。

「はじめまして。あなたが山久姫乃さん？」

神野が姫乃に向き直り、まつすぐに視線を合わせてきた。

彼の目の高さは、姫乃よりもかなり高い。ヒールの高さを差し引いても、神野の身長は少なくとも一八五センチ以上あるはずだ。

正面斜め上から見つめられて、思わず一步うしろに下がりそうになる。

「はい、私が山久姫乃です。はじめまして。神野友哉さんですね？」

「そうだ。どうぞよろしく」

神野が姫乃に一歩近づき、握手に応じた。そして、一秒も経たないうちに手を離し、視線を窓の外に向ける。

いかにもそつけないし、愛想笑いひとつしない。それどころか、こちらを見る目は冷淡と言つていいほど冷たかった。

クールで俺様――

事前にそう聞かされていたが、第一印象で、神野の性格はおおよそ把握できたような気がする。

それに、姫乃は彼がそっぽを向く前に、こちらの全身に視線を走らせたのを見逃さなかつた。おそらく「デカい」とか「予想していたのと違う」とでも思ったのだろう。いくら無理なお願いを聞いてもらう立場であるとはいえ、值踏みされるような視線は、正直あまり気持ちいいものではない。

とはいえる、窓の外を見る立ち姿がファッショントレンドから抜け出てきたかのように、かっこいい。祥子から超絶イケメンだと聞いていたが、顔面のみならずスタイルまでパーフェクトだった。

これは、完全に想像の域を超えている。

姫乃は笑顔を引き攣らせながら、今一度彼の全身に見入った。

「事情はすべて戸田夫妻から聞いてるよ。だが、お互いの詳しい経歴や素性については、会った時に直接確認しろと言われた。よかつたらワインでも飲みながら、少し話さないか？」

「え、ええ。そうしましょう」

姫乃は神野の誘いに応じて、テーブルを挟んで彼の正面に座った。その間に、神野が

ワインをグラスに注ぎ、姫乃の前に置いてくれた。

「じゃ、ひとまず無事顔を合わせた事に——」

神野がグラスを掲げ、姫乃も同じようにしてからワインをひと口飲む。

アルコールなら一応なんでも飲めるし、むしろ好きなほうだ。特に、美味しい食事を

取りながらの飲酒はリラックス効果もあり、一人でホテルライフを楽しむ時は主にワイ

これから姦活を始めるにあたり、今日は限りにしばらくの間アルコールともお別れだ。

そんな事を思いながらグラスを傾けていると、視線が勝手に彼の手元に吸い寄せられ、
「、形っ、、旨っ奇麗っ」刀り前こうしこ八こ注目する。

（ゴツゴツ）くるサ（）、す（）、崎麗な手（）。指の長（）、

つい人の手に目が行ってしまうのは、職業病のようなものだ。

姫乃はグラスを置き、神野のパーツの美しさに感嘆した。

切敬語はやめてもらいたい

神野のほうが年上だし、こちらがお願いする立場なのに？

しかし、彼がそう言うのなら従うしかない。

わかりま……わかつた。お言葉に甘えて、そうさせてもらうわね

神野が頷き、それからすぐに双方が用意してきた会社の概要なども記した身上書を交換して目を通した。

それによると、神野は東京都出身で現在三十二歳。幼稚園から大学まであるエリート学校を卒業して渡英。五年間、同国の投資会社に勤務したのちに帰国して、投資コンサルタント会社「パランティアキャピタル」を創設。代表取締役社長として采配を振るい、毎年順調に利益を伸ばしている。

家族に関しては、父方の祖父は某大手卸売会社の現会長。実父は国内大手百貨店の代表取締役社長を務めており、実母は名の知れたフィットネスジムの経営者だ。

（何これ！ 筋金入りのお坊ちやまじやないの！ それに、会社の資本金は二十四億円 事業所は六か所で従業員数が八十二名って、うちと規模が違ひ過ぎる……！）
姫乃は内心青くなりながら、自分の身上書を手にしている神野を見た。

ごく普通の家庭に育つた姫乃は、お受験には無縁の庶民だ。地元にある幼稚園と小学校に通い、高校大学と中堅と言われる学校に入学し、卒業した。

その後はジュエリーデザインを学ぶために専門学校に進学。在学中に自作のジュエリーをインターネットで販売するようになり、卒業と同時に実店舗の「HIMENO」をオープンさせた。

開業に必要な資金はアルバイトで必死に貯めたもので、店舗は元々父方の曾祖父が本屋を営んでいた場所であり、それを姫乃が譲り受けた。

神野と親友関係にある正光も良家の子息であり、彼の紹介ならそれ相応の人物だと思っていたが、まさかこれほどエリートだったなんて……。

身上書に視線を落としていた神野が軽く頷いたあと、ワインをひと口飲む。

うつむいた状態からグラスを傾けるまでの動作が、優雅すぎる。首から頸にかけてのラインが息を呑むほど綺麗だし、上下する喉仏の動きに目が釘付けになつてしまふ。（指だけじゃなくて、首も素敵……。あの首にネックレスをつけたい。金種はプラチナ……モチーフは……羽とかいいんじゃない？）

「どうかしたか？」

声をかけられ、ハツとして我に返る。デザインを考えているうちに、いつの間にか、かなり前のめりの体勢になつていて。

「あ……ごめん。神野さんの首を見ているうちに、ネックレスのデザインが浮かびそうになつたものだから……」

彼の目力は、まるでこちらの頭の中を覗こうとしているかのように強力で、思わず目を逸らしたくなってしまう。

しかし、目的を滯りなく達成するためには、いちいち怯んでいる場合ではない。

姫乃は場を取り繕うようにグラスを持ち、ワインをもう一口飲んだ。神野はと言えば、すでに身上書に視線を戻している。

「仕事熱心だな。だが、俺が普段身につけるのは腕時計くらいだ。ネックレスに限らず、装飾品は俺の趣味に合わないし、必要性も感じない。煩わしいだけだ」

低く響く声のトーンは、これまでと変わらない。けれど、真っ向から自分が扱つているものを否定され、微笑んだ口元が少しだけ強張る。

（いけ好かない男。誰も身につけてくれだなんて言つてないし！）

そう思うものの、無理を聞いてもらつている手前、彼の機嫌を損ねるのは回避せねばならない。

「身上書、見終わった。仕事が趣味で健康状態が良好、出身地と会社を興した年も同じだな」

姫乃は短く返事をして、もう一度彼の身上書に視線を落とした。

（確かに、同じ。だけど、それ以外はぜんつぜん違いますけど！）

神野の会社があるのは都心のビジネス街でも一等地と呼ばれる場所であり、「神野ビル」という名前からして自社が所有する建物だと思われる。

「H I M E N O」の所在地も都心の自社ビルだが、駅近ながら面積は決して広くない。建物は築五十年超の四階建てで、一、二階を店舗にして、その上は姫乃が住まいとして使っている。

異業種とはいえ、すべてにおいて格差があるし、資本金の額も三桁も違う。神野は一流の経営者としての余裕と風格をすでに身につけており、圧倒的なオーラを感じさせた。

「H I M E N O」も順調に利益を伸ばしてはいるが、経営者として同列に並ぶとなると躊躇せざるを得ない。

「店に置いている商品は、どのくらいの価格設定なんだ？」

神野が、姫乃の身につけているネックレスやピアスを見ながら、そう訊ねてくる。それからすぐに、彼の視線が姫乃自身に移った。さりげなく見ているようで、やはり自己紹介した時と同じ、値踏みするかのような目つきだ。

「使っている金種や石にもよるけど、だいたい二万円から五十万円の間。日常使いのアクセサリーからブライダル用のリングまで、いろいろ扱ってるの。受注生産もしていて、

お客様の要望を聞きながら理想のジュエリーと一緒に作りあげて、完成の喜びを分かち合うのよ。そのあとのケアも万全で——」

「商品は自社で製造しているのか？ スタッフはぜんぶで何名だ？ デザイナーは君のほかに何人いる？」

「商品はすべて自社製造よ。スタッフは私を含めて四名で、全員がデザイナー兼彫金師なの」

つい熱く語っている途中で話を遮られ、矢継ぎ早に質問をされた。口調は冷淡でそれけなく、まるで尋問を受けているような気分になる。

「なるほど」

納得した様子の神野が、ようやく身上書から顔を上げた。

「大学で英文学を専攻したという事は、もともとジュエリーデザイナーを目指していたわけではないよだな」

「ええ。在学中に『ソリス』でアルバイトをしている時、店に置いてあるアクセサリーに興味を持ったのがきっかけだつたわ」

「いいえ。正光さんは祥子が彼と結婚したタイミングで顔を合わせたの。祥子が『ソリス』の社長と結婚するつて聞いて驚いたわ。だつて、かつてのアルバイト先だし、私

の人生が変わるきっかけにもなった会社だったから」「『HIMEENO』の取引先に『ソリス』が入っているが、これは祥子さんの後ろ盾のおかげか?」

自社製品は、『ソリス』を含む二つのアパレルメーカーの店舗に置かせもらつていて、『ソリス』に関しては祥子を介して正光に商品を見てもらつたのがきっかけで、彼女の存在があつてこそその取引先であるのは事実だ。

「そうね。祥子がいなかつたら、直接正光さんに会う事なんて叶わなかつたでしようから」「そうか。ビジネスにおいて人脈は貴重だからな」

軽く頷いた神野の様子は、これまでと同様に淡淡としている。けれど、こちらを見る顔には、姫乃ばかりか『HIMEENO』をも査定しているかのような表情が見て取れた。別に対抗意識を燃やしているわけではないが、どうも神野の言葉には若干の棘を感じる。

二つ年上とはいえ、常に上から目線の話し方も気に入らない。けれど、とつつきにくらい人物だと事前に聞いていたし、肝心なのは彼が持つ優秀な遺伝子なのだ。

ふと見ると、神野のグラスが空からになつていて、

姫乃は彼のグラスにワインを注ぎ足そうとボトルに手を伸ばした。しかし、一瞬早く動いた神野に先を越されてしまう。

彼が自分のグラスにワインを注ぎ、チラリと姫乃を見る。そして、姫乃が首を横に振ったのを見て、ボトルをワインクーラーに戻した。

「戸田夫妻は、君がほしがつてゐる優秀な遺伝子を提供する者として、真っ先に俺のところに連絡したと言つていた。つまり、彼らが知つてゐる大勢の人間の中で、俺が一番ふさわしいと考えたという事であり、その選択は百パーセント正しい判断だと思つてゐる」

神野はそう言い切り、姫乃の目をまっすぐに見つめてきた。

これまでのやり取りから察するに、神野はかなりの自信家であり、それを隠そつともしない男だ。

今後それが鼻につく事もありそうだが、子供の父親としてこれ以上条件のいい男性はほかにいなさう。

姫乃の疑惑をよそに、神野が表情ひとつ動かさずにワイングラスを傾ける。

「ええ、確かに。引き受けてもらつて、神野さんには心から感謝してゐるわ」

姫乃は彼に向かつて丁寧に頭を下げた。実際、神野はなんの見返りも求めずに、今回この件を引き受けてくれたのだ。

「俺が今回の事を引き受けたのは、正光の頼みだからだ。それと、おそらく問題ないと思うが、俺にはこれまでに女性を妊娠させた実績がない。だからできるだけ早く病院に

行つて、しかるべき検査をするつもりだ」

「ありがとう。そうしてもらえると助かるわ」

確実に妊娠するためには、双方の生殖機能や感染症等の事前チェックは必須だ。タイミングを見計らって検査をしてほしいと言おうと思っていたところに、彼のほうから申し出てくれたのは、まさに渡りに船だつた。

「正光に頼まれたからには、失敗で終わるわけにはいかないからな。今回の件は、必ず最後までやり遂げるつもりだ」

神野の口ぶりから察するに、彼は正光に対してもう一つの目的がある。それは、そこまで言いくらいだから、かなり義理堅い性格だと推測できる。

理由はどうであれ、神野がこの件に積極的に取り組もうとしているのだけはわかつた。これなら、きっとうまくいく——そう確信した姫乃は、彼の気持ちをそがないよう最大限気を配ろうと決意する。

「貴重な時間と労力を提供する決心をしてくれて、ありがとう。だけど、本当に見返りなしでいいの？」

「もちろんだ。俺は君に子種を提供する事によって、正光の願いを叶えることができる。それで十分だ。第一、仮に見返りを求めるとして、君は俺に何を提供できるんだ？」

そう言われ、姫乃は言葉に窮した。なるほど、すべてにおいて自分よりも格が上の彼

に言うには、おこがましい台詞せりふだったかもしれない。しかし、それでも何かしら自分にできる事があれば、多少なりともお礼をしたいと思う。

「私が提供できるものは、そう多くないわ。でも、もし何かあれば、遠慮なく言つて。できる限りの事はするから」

またしても值踏みするような目で見られて、姫乃は密かにむかつ腹を立てた。けれど、当然表情に出したりせず、口元に浮かべた笑みを倍増させる。

「それと、戸田夫妻から聞いていると思うけど、妊娠するまでにかかる費用は全額私が負担するわ。検査費用はもちろん、今後また何かしら立て替えてもらうものが出てきたら、後日まとめて精算するって事でいいからら？」

姫乃渾身の笑顔を見ても、神野はまったくの無反応だ。それどころか、若干うんざりしたような表情を浮かべながら口を開いた。

「話は聞いているが、費用に関してはいろいろと面倒だし、必要に応じてそれぞれが負担するという事にでもらいたい」

「えつ……でも、ただでさえ見返りなしで協力してもらうのに、それだと神野さんに余計負担がかかるわ」

「負担？ 僕にとつては、そのせせこましい考えのほうが負担だ。気持ちよく引き受けてもらいたいなら、面倒な事を言うのはよしてくれ」

いかにも煩わしそうに言われては、引き下がるしかなかつた。

かくなる上は、すべてを終えたのちに改めてお札をさせてほしいと申し出るしかないとだろう。

「とにかく、さつさと種付けを終わらせてしまおう。そのためには、君が考へている具體策を聞かせてもらいたい。ちなみに、妊娠に至るまでの必要な知識はすでに頭の中に入つてゐるから、その辺りの説明は不要だ」

神野の話し方は、終始冷ややかで淡淡としている。それは姫乃自身への興味がまるでない事の表れなのだろうし、こちらだって関心があるのは彼の精子のみだ。

「私はもう検査を済ませていて、妊娠が可能なのは確認済みよ。でも、生理の周期が一定じゃないの。だから、排卵日がいつか予測するのが難しいし、基礎体温もあまりあってにならないのよ」

「だとしたら、タイミング法は使えないな。お互に忙しい身だし、妊娠期間は短ければ短いほうがいいだろ？」

「ええ、もちろんよ」

神野が領き、グラスに残つたワインを喉の奥に流し込んだ。そして、ボトルを見つめながら三杯目のワインをグラスの中になみなみと注ぐ。

（量は飲まないと言つたくせに、結構飲むじゃない）

姫活中であつても、男性はアルコールを摂取しても問題はない。むろん、飲み過ぎて勃起不全にならると困るが、神野の様子からすると、おそらくアルコールに強いのではないかだろうか。

姫乃は神野について見惚れてしまつて、自分に気づき、それとなく目を逸らした。子種の提供者は美男子であるに越した事はない。しかし、彼は姫乃の予想していた何十倍も美形だ。喜ばしい事ではあるが、かつこよすぎてなんだかいろいろとやりにくい。

そういつた意味でも、神野との姫活は短期間で済ませたいと思う。医師の手を借りる事は当初から考えていないため、自力で行う必要がある。

ひとつは提供者に精子を採取してもらい、それを即座にシリングを使って自分で膣内に注入する方法だ。もうひとつは実際に性行為をする方法だが、これは相手の同意がなければ実行できない。

姫乃は性行為をする覚悟はできているし、自身の生理不順を念頭に置くと、むしろ前向きに考えたいと思つていた。しかし、さすがに自分の意見を押し付けるわけにはいかないし、まずは神野の意向を聞いてからだろ。

「一連の種付けに関する話をしたあと、姫乃は神野自身の希望を訊ねた。

「確實性を重視するなら、精子を採取して膣内に注入するより、実際にセックスをした

ほうが効率的だと思^うが

「そうね。そうすれば直接精子を体内に入れられるし、手^つ取り早くて確実だわ」椅子の背にもたれかかっていた神野が、少しだけ身体を前に倒して姫乃を見る。

「君はもう、そうする心^づもりができるという事か?」

「もちろんよ。私、どうしても子供がほしいの。そのためならなんでもするわ。私としては、排卵日がはつきりしない分、とにかく回数を重ねてできる限り早く妊娠したいの。そのために、できるだけ努力する——そういうスタンスでいるんだけど、どうかしら?」「異論はないよ。お互いに忙しい身だが、種付けをするだけだし、やろうと思^えば会つて短時間で終わらせるのも可能だ

「じゃあ、スケジュールを共有して、時間が空いた時は互いに連絡を取り合うという事でいい?」

「問題ない」

幸い、二人の職場は車で三十分の距離にある。彼さえ積極的に協力してくれたら、すぐにも目的を達成できそうだ。そう考えると自然と気持ちが高揚し、作り物でない笑顔が浮かんでくる。

ついニヤついていると、神野がミニバーに行き、新しいグラスとともに瓶入りのミネラルウォーターを持つて戻つて来た。そして瓶の栓を抜いてグラスに注^いび^びと、無言で姫

乃に手渡してくる。

「ありがとう」

姫乃は礼を言い、続けざまに三口ミネラルウォーターを飲んだ。きっと知らない間に喉が渴いていたのだろう。そのせいか、飲み込む時にいつも以上に喉が鳴つてしまつた。「具体策については、これで決まりね。あと、確認なんだけど、目的が妊娠だから極力性的な快楽を得るのは避けたほうがいいわよね?」

「と、言うと?」

「例えば、本当の恋人同士のようなキスや前戯は必要ない。余計な気遣いもなしつて事でいいわよね? 洋服についても極力脱がずに済ませたいでしょ? あと、もし必要なら、何かしら補助的なグッズを用意するから、リクエストがあれば言つてちょうだい」姫乃は自分が性的に魅力的な女だとは思つていないし、「そそる」か「そそらない」かで言えば後者だと思う。妊娠を目的としたセックスには挿入が必須だが、自分が相手では神野が勃起しない可能性もある。

「行為が終わつたら、それぞれのタイミングで速やかに立ち去る。妊娠したとわかつたら、すぐに連絡をするわ。連絡先は、神野さん個人の番号で構わない?」

姫乃は事前に考えておいた、セックスに關する一連のルールを口にした。特に異論もなく承諾してくれるものと思つていたが、神野は小首を傾げながらワイン

グラスを揺らしている。

「何か気になる点がある？ あるなら、はつきり言つてくれて構わないわよ」

姫乃はグラスにミネラルウォーターを注ぎ足し、再度喉を潤した。

「そこまで細かく決める必要があるか？ あえてそうしなければならない理由があるなら、聞かせてもらいたい」

恋愛関係にない自分達がセックスをするのだ。むしろ、もっと細かな決め事を作つてもいいくらいだ。

姫乃は彼の発言を意外に思いながら、自分の考えを口にした。

「もちろん、必要以上の接触を避けて、多少なりとも感情が揺さぶられるのを避けるためよ」

そう明言した姫乃の顔を見ながら、神野が腑ふに落ちないといった表情を浮かべる。

「セックスをすれば、多少なりとも快感が伴うのは当然だ。女性がオーガズムを強く感じれば感じるほど妊娠率がアップするというし、そうであれば、むしろ積極的に快楽を追求したほうがいいと思うが？」

確かにそういう事を書いた資料を読んだし、快楽によって身体が開き、妊娠の可能性が高まるのは科学的に証明されているようだ。

「だけど、あくまでも妊娠が目的なんだから、挿入して射精さえすれば事足りるわけだ

し……」

種付けを依頼した立場の自分が言うのもなんだが、恋人同士ではない男女がセックスをする事自体、不道徳だ。

それを伝えたつもりだが、もっと具体的に言わなければわかりづらかっただろうか？ 神野の発言から判断するに、二人の間には実際の種付けに関する考えに少しづれがあるようだ。

姫乃がどうしたものかと考え込んでいると、神野が指でトンとテーブルを叩いた。

「ああ、そうか。もしかして君は、セックスで強い快楽を感じる事で、恋愛感情が生まれる——つまり、俺に本気になるかもしれないと心配しているという事か？」

「はあ？」

思つてもみない事を言われ、姫乃は啞然として固まる。そして、すぐに首を横に振つて否定した。

「違うわ！ そんな心配は、まったくしてないから！」

冗談じゃない！

たかが妊娠目的のセックスをしたくらいで、誰が本気になつたりするものか。そんなにチヨロい女ではないし、もともと淡白でセックスへの執着もない。

姫乃の鼻孔が膨らむのを見て、神野が片方の眉尻を上げた。

「それなら問題ないな。俺のほうもぜつたいに本気にならないから安心してくれ」

シニカルな表情を浮かべながらそう言われ、少なからずカチンとくる。

（失礼ね！ いくらイケメンでも、そこまではつきりと言わなくともいいでしょ！）

これがリッチで成功したイケメン特有のものなら、そのご立派な鼻つ柱をへし折つてやりたい気持ちになる。しかし、向こうが言い出した事とはいえ、先に否定したのは自分だし、彼はそれに追従しただけだ。

（とにかく、今は我慢！）

姫乃は強いて穏やかに微笑み、憤る気持ちを呑み下した。

「今回の件はビジネスと同じだ。やるからにはぜつたに成功させる。いずれにせよ、俺は目的達成のためなら手段は選ばないし、協力も惜しまない」

「ありがとう。今回の事は、私も神野さんと同じよう捉えてるわ」

さすが一流の経営者だ。実にビジネスライクだし、細かい事はともかく、基本的な考え方は似たところがある。

性格に多少の難はあるが、これならうまくやつていただけるかもしれない。

そう思つたのも束の間、神野の視線が姫乃の着てカットソーの胸元に下りた。まっすぐそこを見る目は、まるで遠慮がない。腕を交差させて隠したいという衝動に駆られたが、自意識過剰だと思われるのが嫌でじつと我慢する。

「俺は君の協力者として、君が速やかに妊娠する事を望んでいる。俺が思うに、そのためにはあれこれ規制しないほうがいいんじゃないか？」

「それはつまり、付き合つてゐる者同士がするような、普通のセックスをするつて事？」

「普通、とは？」

「えつ……と、例えば、会つてハグやキスをして、気持ちが盛り上がりつてから洋服を脱いで——」

「セックスは人それだし、同じ段階を踏むとは限らない」

「それはそうだけど……。とにかく、イチャイチャしてきちんと洋服を——つて、脱がないでする時もあるし、会つていきなりつて事もあるわよね——」

神野が言うように、セックスの始め方は様々だ。そんな当たり前の事を言われ、うつかり馬鹿正直に反応してしまつた。

「いけ好かないばかりか、瘤に障る男だ。」

姫乃が口を噤んだのを見て、神野が口元に冷やかな笑みを浮かべる。

「どうやら君は、もう長い間セックスをしていないようだな」

それだけ言うと、神野がこちらの返事を待つような視線を投げかけてきた。

確かに、もうずいぶん長い間ご無沙汰だ。けれど、それがなんだというのか。とにかく、これ以上冷笑を浴びせられるのはごめんだつた。

「あなたは、どうしたいの？」希望を聞かせてもらつてもいいかしら」

少々強気になつてそう訊ねてみるが、神野は表情を変えずに姫乃を見つめてくる。

「待ち合わせをして、セックスをする。それだけでいいんじやないか？」あれこれルールを決めておくと、それに気を取られるし、ルールなしのほうが、こちらとしてもやりやすい。だが、最終的な判断は君に任せる」

こちらが示した方針を搔き回しておいて、決定権はそちらにあると丸投げされた。

神野友哉という人物は、いつたい何を考えているのかわからないし、思つていた以上に扱いにくい男であるらしい。

「じゃあ、とりあえず実際に一度やつてみるつていうのはどう？」進めながら、ルールを決めるかどうか話し合う感じで

「わかつた。参考までに聞くが、前にセックスをしたのはいつだつた？」

「それ、関係ある？」

「大いにあるね。女性の身体はデリケートだ。それによつて、いろいろとやり方を変える必要が出てくる」

やり方とは、当然セックスの事を指しているのだろう。余裕のある態度は気に入らないが、ここは正直に答えるべきだと判断する。

「二年前よ。別にそれで支障はなかつたし、恋愛はもうこりごりなの」

少しばかり動搖したせいか、つい余計な事まで言つてしまつた。しかし、知られたとしても相手はただの精子提供者だ。

いくらいケメンであろうと、彼が言つたとおり、これはビジネスだと思えばいい。

姫乃はグラスに入ったミネラルウォーターを一気に飲み干し、どうにか落ち着きを取り戻した。

「恋愛に関しては俺も同意見だな。面倒だし、わざわざ時間を割いてまでするようなものじゃない」

なるほど。神野の容姿からすると、おそらくモテすぎて相手に事欠かず、恋愛に対しても食傷気味といったところだろうか。

癪に障る男だが、女性の扱いに慣れているのは、こちらにとつては好都合だ。

「さて……俺のほうはいつでも準備万端だ。バスルーム、先に使うか？」

神野に先を譲り、姫乃は椅子から立ち上がりつて窓際に向かつた。彼が部屋を出てバスルームのドアを開ける音が聞こえてくる。

姫乃はようやく肩から力を抜いて、夜景を眺めながら大きく深呼吸をした。

（なんだかんだで主導権を握られっぱなしだな……。だけど、立場的に今のままで行くしかないのかも）

優先すべきは妊娠であり、そのほかの事はぜんぶ後回しにしなくてはならない。そういう腹を括り、窓の外を見つめ続ける。

「先に向こうの部屋に行かせてもらうよ」

しばらく経つて、背後から神野に声をかけられた。振り向くと、備え付けのバスロードアを閉めると、洗面台に両手をついて自分の顔をまじまじと見つめた。

（する時つて、照明はどうするのかな。明るかったら嫌だし、メイクは落とさなくていいよね？）

姫乃は神野がいなくなると同時に、バッゲを持つてバスルームに急いだ。中に入つて鏡に向かって頷くと、姫乃は急ぎながらも入念に身体を洗い、下着をつけないまま備え付けのバスローブを羽織つた。ここに来るまでの間に、できる限りのボディメンテナンスは済ませている。

早足で廊下を歩いてベッドルームに入ると、背中を向けて立つていた神野が姫乃を振り返つた。

「早かつたな」

「お互い、迅速に事を進めたいのは一緒だから。それに、明日は二人とも仕事——わ

わっ！」

歩き進めた先に見えてきたベッドの上に、薔薇の花びらで描かれたハートマークが見えた。

その存在を、すっかり忘れていた！

そもそも部屋のそこかしこに薔薇が飾られているのに、神野の存在が強すぎてすっかり意識から抜け落ちてしまつていたのだ。

「こ、これは違うの！ 用意したのは私じゃなくて、祥子が変に気を回しちやつて。彼女、たまに突拍子もない事をする時があるのよ。これもそのうちのひとつで——」「なるほどな。祥子さんならやりかねない

おそらく姫乃同様、過去に祥子に驚かされるような事があつたのだろう。姫乃が言い訳をするまでもなく、神野が納得したような表情を浮かべる。

わかつてもらえて、よかったです！

誤解されずに済んで、姫乃はホッと胸を撫で下ろした。

「祥子さんは、いつからの縁なんだ？」

「高校の時に同じクラスになつて以来の仲なの。私と祥子って外見からすると、まったく合わなそでしよう？ 昔からよく不思議がられたりしたものだわ」

長身の姫乃に比べて、祥子は三十代女性の平均身長に満たない。

昔からスレンダーで女性らしさに欠ける姫乃に對して、祥子は適度に丸みを帶びた身体つきをしている。おまけに、可愛げのある美人で性格も優しく、学生時代からかなりモテていた。

そんな彼女は、大学卒業後は新卒で「ソリス」に入社し、秘書課に配属された。ほどなくして、元来の愛想の良さと仕事ぶりを買われ、社長秘書に抜擢。その後、かねてから片想いされていた正光の猛アプローチを受けた末に、彼の妻に納まつたというわけだ。「私と違つて、祥子は女性から見ても放つておけないタイプでしょう？」はじめは合わないなつて思つてたんだけど、話してみると妙に気が合つちゃつて。家もそう遠くなかったし、自然と親しくなつて、もう十五年来の親友なの」

「そうか」

ついと伸びてきた神野の手が、姫乃の頭からバンスクリップを外した。ひとまとめになつていた髪の毛が、ゆるいカーブを描きながらバスローブの肩を覆う。彼は姫乃の髪の毛を指で梳すき、サラサラと落ちる様を見つめている。

突然の事に、姫乃は彼の顔を見たまま固まつてしまつた。

「綺麗な黒髪だな。指どおりがよくて、まるで絹糸みたいだ」

姫乃はこれまでに一度も髪の毛を染めた事がなく、パーマも未経験だった。

豊かで艶やかな髪の毛は姫乃が自慢できる数少ないもののひとつだ。けれど、今まで

一度も男性の目に留まつた事はなかつた。異性からの讃辞に免疫がないせいか、神野の言葉が思いのほか心に染みる。

「ありがとう。日頃お客様と接する仕事をしているから、一応外見には気を遣つてゐる」「いい心掛けだな。経営者たる者、会社のトップとして常に自分を正しくプロデュースすべきだ。さあ、お喋りはこのくらいにして、そろそろ始めようか。部屋の灯りはどうしたい？」

雑談から急に本題に入られ、少なからず動搖する。しかし、実際に性行為をしての子作りは想定していたし、今さらあわてるなんて変だ。

おそらく神野が想像を遥かに超えるハイスペックイケメンだつた事が理由だろうが、ここは予定どおり、ビジネスと同様に毅然とした態度を貫かねばならない。

姫乃は自分を鼓舞し、覚悟を決めて口を開いた。
「ヘッドボードの裏と、テーブルの間接照明だけで」

「了解」

姫乃が言つたとおりに照明を落とすと、神野がおもむろにバスローブの前を寬げた。引き締まつた胸筋は驚くほど均整が取れており、日頃からきちんと鍛えているのがわかる。

それだけならまだしも、全体のフォルムがセクシーで、その肉体美といつたら時折女性誌の表紙を飾る男性モデル以上に魅惑的だ。

（す、すごい……。洋服を着ている時は、それほどじやなかつたのに、脱いだらフェロモンだ漏れつて感じ……！）

だが、ここで怯んではいけない。

姫乃は自分を奮い立たせ、彼の前に進んで右手を差し出した。

「では、神野友哉さん。改めて、どうぞよろしく」「よろしく」

神野が姫乃の手を掴み、ギュッと握つてきた。

こちらを見つめてくる瞳が、磨き上げた宝石のように綺麗だ。彼は、それからすぐに姫乃の手を離し、なんの躊躇もなくバスローブを脱いでベッドサイドに置かれたカウチの上に置いた。

一糸纏わぬ姿になつた神野が、ベッドの上のハートマークに視線を向ける。その立ち姿は、モデルどころか、ギリシア神話に出てくる男神さながらという感じだ。

姫乃は目のやり場に困り、彼の上体に視線を固定させた。

「せつかく祥子さんが演出してくれたんだ。あとでしつこく感想を聞かれるだろうし、一応ハートの上にダイブでもしておくか」

そう語る彼の眉間に、薄つすらと皺が刻まれている。
(うわつ、いかにも迷惑そう)

確かに、祥子はノリノリで「どうだつた？」と気が済むまで聞いてきそうだ。神野の機嫌を損ねないためにも、ここは彼の言葉に従つておくべきだろう。

姫乃は頷きながら彼に一步近づき、バスローブの腰ひもを解いた。そして、ひと思いにそれを脱いで、カウチの上に放り投げる。

「そうね。どうせならダイブして花びらをそこら中に撒き散らしましょ」

裸を見られまいと神野のすぐそばまで近づくと同時に、腕の中に取り込まれ、そのまま仰向けになつてベッドの上に倒れ込んだ。

その途端、何枚もの薔薇の花びらが飛び散り、神野の背後をふわふわと舞い踊る。姫乃はポカンと口を開けたまま、目をパチクリさせる。まさか、いきなり抱き寄せられるとは思つていなかつたし、薔薇の花びらを背負う神野は、昔見た少女漫画のヒーローのようだ。

「は……花びらの上にダイブすると、こうなるのね」

何か言わなければと話した声が、明らかに上ずつていて。

我ながら間の抜けた事を言つたものだと悔やんでいると、姫乃の身体を閉むようにして手をついていた神野が、おもむろに身を起こした。

姫乃の腰を挟む位置で膝立ちになつた彼の顔には、白けたような表情が浮かんでいる。少なくとも、神野がまったくこの演出を喜んでいない事だけは確かだ。その証拠に、眉間の縦皺がより深くなっている。

「ふん……まるで新婚初夜を迎えるカップルだな」

【確かに】

短くそう答えた姫乃を、神野が上から見下ろしてきた。そして、そのまま視線を姫乃の胸元に移動させる。彼の位置からは、姫乃の全身が見えるわけではない。けれど、さすがに全裸だと落ち着かないし、かなり強い羞恥心も感じる。

『これじや興奮しないし、見るからに感度も悪そうだな』

『胸、小さすぎて揉み甲斐がないよ』

姫乃の頭の中に、かつて元カレ達に言われた言葉が思い浮かぶ。顔同様、姫乃の身体は凹凸に乏しく、胸に至つては寄せて上げてようやくCカップだ。身体つきは割とバランスがよく、骨格もしつかりしている。けれど、女性らしい丸みに欠けるし、お世辞にもセクシーとは言い難かった。

ビジネス上必要を感じて、外見には気を付けている。けれど、恋愛から遠ざかるうちに、服を脱いだ時の自分と向き合う機会は格段に減つた。エチケットとして全身のメンテナンスはしたが、どこを取つても完璧な神野には対抗できないし、自分では明らかに

力不足だ。

（元カレ達と同じような事を言われたらどうしよう……）

そう思いながら顔を横に向けて黙り込んでいると、神野が再び肘を折つて姫乃の目前まで顔を近づけてきた。

「もしかして、緊張してるのか？」

そう訊ねられ、姫乃はギクリとして顔を上げた。

神野は彼氏ではなく、単なる子種の提供者だ。ここに来て緊張して固まるなんて、彼にしたら迷惑でしかないし、今は過去の感情に囚われている場合ではない。

自分にそう言い聞かせると、姫乃はきつぱりと首を横に振つて両方の口角を上げた。『いいえ。さあ、始めましょ』

きっと神野は姫乃の強がりに気づいている。しかし、あえてそれ以上何も言わず、頷くだけに留めてくれた。

それをありがたく思いつつ、姫乃は意を決して、さつきから視界にチラチラと入つてくる神野の男性器を見た。

それはまだ勃起状態にはなつておらず、おそらくこのままで硬くなる事はないだろう。

（やつぱり、私相手じや勃たないんだ……）

そう悟るなり、姫乃はいたたまれずに表情を強張らせて赤面する。

こうなる前に何かしら準備しておくべきだった。それなのに、神野に対しても必要なら補助的なグッズを用意するなどと悠長な事を言つた上に、セックスに関するルールがいるなんて知つたような口をきいてしまつた。

こちらはよくても、神野自身がその気になれなければ、挿入はできない。頭の隅で予想していたとはいえ、実際にそうなつてみると情けなさで胸が潰れそうだつた。

しかし、今はとりあえずこの状況から抜け出さなければならない。

「やっぱり、ルールなんて決めないほうがいいみたい。私、見てのとおりグラマラスとはほど遠い身体つきだから、自然に勃起つてわけにはいかないわよね。もし必要ななら手を貸すし、具体的に言つてくれたらそのとおりにするけど……」

我ながら、かなりあけすけな発言をしているものだと思う。けれど、ここまで来たら、もう恥じらつてはいる場合ではない。

「俺のほうはどうにでもなるから、気遣いは無用だ。それより、君のほうの準備がまだ整つていなあんじやないか？」

「準備……って——」

「濡れてなきや、入るものも入らない。無理に挿れようとすれば、君の身体に負担がか

かるだろうし、それは俺の本意ではない。それに、苦痛を伴うようなセックスで妊娠しても、あとあと辛い記憶が残つてしまふんじやないか？」

思いがけない気遣いに触れて、姫乃は神野を見つめたまま言葉をなくした。セックスをするのは頭ではなく身体だ。濡れるには気持ちの盛り上がりが必要だし、始めようと意気込んだだけでできるものではない。おそらくさつき神野がルールを決めるのを渋つたのは、こちらを気遣つての事だつたのだ。

姫乃は自分の思慮のなさを恥じ、上辺だけで彼の人となりを判断した事を猛省する。【もうせい】
「そうね。じゃあ、ちょっと待つてもらつてもいい？ どうにかして準備を整えてみるから】

神野が領き、姫乃の身体の上にブランケットをかけてくれた。そして、さりげなく身体を離し、隣に仰向になつて寝そべる。

「気遣つてくれて、ありがとう」

「どういたしまして」

種付けをするには、方法はどうであれ膣内に精子を注入する必要がある。シリンドジを使うにしろ男性器にしろ、挿入をスムーズにするためには潤いが必須だ。

つまり、俗に言う愛液がなければインサートは困難になる。

そのため、姫乃は事前にエロティックな映画やドラマを視聴したり、それっぽい妄想

をしたりして愛液の分泌を促す練習をしていた。しかし、もともと感じにくく濡れにくい体質らしい。

練習の時にはうまくいったが、いざ本番を迎えると、思った以上に雑念に邪魔されてしまつた。

「時間はあるし、焦る必要はない。グラマラスとはほど遠い身体つきなのは間違いないが、綺麗に引き締まつているし、普段から鍛えたり、きちんとメンテナンスをしているのは見ればわかる」

忙しくてなかなか通えていないが、姫乃も一応ジムに通つていて。立ち仕事の合間に軽くストレッチをしたり、早起きをした時などは近くにある公園でジョギングをする事もあつた。

「そう言ってくれて、ありがとう」

「礼には及ばない。思つた事を言つたまでだ」

神野の声のトーンは相変わらず淡々としており、感情の起伏がまったく見られない。きっと彼は、種付けをするという目的のみに注意を向けており、そのほかの事は気にならないのだろう。

一方、姫乃はと言えば、平常心を装つてはいるものの、非日常すぎる今の状況のせいでも心拍数が上がりっぱなしだ。せめて彼が自分と同じくらいの容姿なら、もう少し気持ちいいのだろう。

「礼には及ばない。思つた事を言つたまでだ」

男だ。

それに、事前に聞いていたとおりのクールな俺様ぶりを發揮してくれている。

（でも様子が言つていたとおり、根は悪い人ではないのかも。だけど、かなり上から目線だし、とつつきにくいのは確かだわ）

どうせ期間限定の関係だし、必要以上に親しくなる必要はない。むしろ、距離を持つて接したほうがいいし、身体は重ねても極力気持ちは通わせないほうがベターだ。

（神野さんの様子からして、気持ちが通い合うなんて事はなさそうだけど）

互いの親友同士が夫婦とはいえ、おそらく子種を提供するなどという話がなければ知り合う事もなかつた二人だ。縁あってこうして同じベッドに横たわつてゐるが、今後妊娠出産しても、彼の名が出生届に記載される事はない。

あれこれと余計な事を考えていたせいか、心も身体もガチガチのままだ。焦れば焦るほど気が逸れてしまい、濡れる気配すらなかつた。

（実は私、もともと感じにくいし濡れにくいの。もちろん今回の件をきっかけに、自分かなつた。）